

感染症入門レクチャーノート



執筆：大野 博司

A5 変型 頁 328 2006 年
定価 3,990 円 (本体 3,800 円 + 税 5%)
[ISBN 4-260-00258-9] 医学書院刊

卒後 2 年目の研修医の大野博司君が、私の前住地の市立舞鶴市民病院を訪ねてきたのは、2002 年の夏であった。“大リーガー医”の見学のためである。医学生時代に、来日中であったカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部の一般内科の泰斗であるローレンス・ティアニー先生の鑑別診断力に接し、痺れてしまったとの由であった。「心臓外科医の道は辞めました。とにかくティアニー先生に追いつき、追い越したい」との青雲の志も耳にした。

そのときに大野君は、ティアニー先生共著の『Essentials of Diagnosis & Treatment』を持ち合わせていたが、それへの実にはびっしりとした書き込みを覗いた私は、彼の「医学書読破力」を確信した。「書く力」は未知数だったが、2003 年春に舞鶴に異動してきた彼は、書く機会も欲しいという。私たちの共著『診察エッセンシャルズ』（日経メディカル開発）の骨子は、その後の約半年に及ぶ大野君の不眠不休の持続力に負うところが大きい。「医学書執筆力」もかなりは実証されたといえる。「スーパーレジデント」の呼び声は、偽りではなかったようだ。

私たちの縁は続き、2004 年春に他の数人の研修医とともに洛和会音羽病院に異動してくることになった。「出る杭は打たれる」というが、「出すぎた杭は打たれない」ともいう。入職当時にいささか感じられた大野君に対する前者の雰囲気は、2 年半後の今日、ほぼ雲散霧消したように感じられる。最大の理由は、臨床現場で彼がとことん働いてきたからである。総合診療医として、感染症医として、トラベルクリニックで、透析室で、そして ICU/CCU で、私が慣れない院長業にもたしている深夜に、よく大野君に襲われたものである。「先生、ICU ナースの〇〇さんや透析室クリニカル・エンジニアの△△君が辞めるなんて、大きな損失ですよ。何とか手を打たないとだめじゃないんですか」。

感染症学は、大野君の最も得意とするところである。舞鶴でも音羽でも、サマーセミナーやウインターセミナーやらが開かれ、各地の研修医や若手医師が混じり合うように接してきた。手ごろな開催場所や多少の資金を提供させられてきたが、互いに切磋琢磨する青年の客気ほど私のような熟年を鼓舞するものも少ない。

本書を散読させてもらったが、「です・ます調」の平易な説明は新鮮だった。コラムでの私語の表白にも驚いたが、若き大野ファンには魅力的なのだろう。肝腎の中身については、読者諸氏の今後の交流に委ねたい。

実用的な医学書が、現場で汗する卒後 6 年目の若手医師によって書かれる時代を迎えた。隔世の感を禁じ得ない。